

T. S. Ashton ;

The Industrial Revolution 1760—1830

Oxford University Press

London, 1948, pp. 167.

中川敬一郎訳『産業革命』

(岩波書店, 東京,

昭和 28 年, pp. v+190)

外池正治



一 産業革命史研究における本書の立場

「このような一連の変化が『産業革命』(The Industrial Revolution)と呼ばれるべきか否かについては、いくらでも議論できるであろう。すなわち、こうした変化は単に『産業上の』(industrial)ものであっただけではなく、社会的な (social)、また思想的な (intellectual) 変化でもあった。また『革命』(revolution) という言葉は変化の急激であったこと (a suddenness of change) を意味するが、実際はそれは経済的過程の特徴ではない。すなわち、しばしば資本主義と呼ばれるかの人間関係の体系は、すでに一七六〇年以前にその根源を持っているし、他方その完全な発達を見たのは一八三〇年以後のことであった。『革命』という言葉には、この連続性という本質的事実 (the essential fact of continuity) を見逃す危険が含まれている。しかし『産業革命』という語句は、幾人もの歴史家によって次々に用いられて来たし、また日常会話の中にしっかりと根をおろしているので、今更代りの言葉を提出するのは学術的<sup>(1)</sup>というものであろう。」

「ある史家は、『産業革命の災禍』(The disasters of the

Industrial revolution) について書いた。もしこれによつて、その史家が一七六〇年から一八三〇年に至る時代が、戦争によつて暗黒化し飢饉によつて陰鬱になったというものであるならば、この言葉に対して何ら反対はできない。しかし彼の意味するところが、技術的・経済的諸変化そのものが惨禍の源泉であったということであるならば、この意見はたしかに不当である。この時代の中心問題は、それ以前の時代よりも遙かに多くなった幾世代かの子供達を、いかにして食べさせ、着せ、雇用するかということであった。アイルランドもそれと同じ問題に直面していた。その解決に失敗して、アイルランドは一八四〇年代にその国民の五分の一を移民と飢饉と病気で失った。もしもイングランドが耕作農民と手工業者の国にとどまっていたならば、イングランドもまず同じ運命をまぬがれなかつたらうし、またうまくいっても、増大する人口の重圧がイングランドの活力の源泉をおしつぶしてしまつたにちがいない。英国が救われたのは、国の支配者によつてではなく、疑いもなく自分自身の当面の目的を追求しつつ、新しい生産手段と新しい工業経営方法を発明するだけの機智と資金とをもつた人々によつてであつた。」

以上はこれから解説しようとするアシュトン教授の名著「産業革命」の始めと結びの部分からの引用であるが、ここに産業革命に対する著者の基本的立場と同時に、産業革命史研究の大きな論争点が明確に示されている。最近の産業革命史研究は、トインビー的「伝説」に対する批判と修正という形で行われてきており、その重大な論点の一つは、産業革命という語によつて理解される一時期の変動をいかに把握するかという根本問題にかかわるものであるが、特に産業革命の連続性(Continuity)の主張およびそれをめぐる問題であり、もう一つは、産業革命の社会的効果、殊に労働者階級への影響に関する問題である。これらの問題をめぐつて、産業革命の激変性レボリューショナルを強調し、そしてそれによつて労働者階級の生活水準はおし下げられたという悲観的ペシミスティック主張(Hannons)と、逆にこのような産業革命の激変性乃至破局性を否定し、それを漸進的エヴォリュシヨナルな性格をもつものとしてとらえ、すくなくとも物質的な面に関しては、多くの部分の労働者の生活状態はむしろ向上したとする楽観的オプティミスティック主張(Chapmanist)とが対立してきた。

(19) 基本文献解題

本書は、アシュトン教授の長年にわたる産業革命史研究の集大成であると同時に、その深い知識をもちこんだ一般教養でもあるが、明らかに後者の立場にたつて書かれたものであることは、ここに引用した文章から読みとることができであろう。まず著者は始めの部分で、産業革命といわれる変化は、単に産業的なものとしてだけでなく、更に社会的なそして思想的なものとしてとらえなければならぬとして、産業革命における変革を精神乃至社会の領域にまで拡大して考えており、産業技術の変化に重点をおく、これまでの連続説者とはかなりちがった広い立場にたつものであることは注意されねばならぬ。しかし、それに続く箇所では、「革命」という言葉が意味する突然的变化ということは実際には経済的過程の特質をなすものではないとして、産業革命の連続性を強調している。革命説が産業革命によってその確立をみたという資本主義体制は、その起原をこの時期のはるか以前に有していると同時に、その完全な発達もはるか後のことであったと考える。だから著者がこの書物の標題にもあるように産業革命の時期を一応一七六〇—一八三〇年と規定したのは、この産業革命という言葉が従来歴

史家のみならず一般の人々によつても長い期間にわたつて使用されてきたという理由によるものにすぎないのであつて、ここに著者が基本的には連続説の立場にあることがうかがわれる。

さてもう一つの結びの部分からの引用においては、産業革命の社会的効果に対する著者の連続的立場に連なる肯定的立場があらわれている。エンゲルス、トインビー、ハモンド等による産業革命は労働階級に貧困をもたらしたとする古典的見解に対して、クラッパムを中心とする実証史学者による産業革命は全体として彼等の生活状態を向上させたとする見解が最近支配的になってきているが、著者はこの後者の動向の主流的立場にたつているといえる。そしてこの書物においても、いわゆる産業革命と呼ばれる変化がなかったら、英国もアジアの生活水準といわれる惨状を経験するようなことになつたかもしれぬとして、産業革命による経済的効果が労働者階級に与えた影響を積極的に評価している。もちろん著者も悲観説が指摘した当時の労働者階級の暗黒面を全面的に否定しているわけではない。しかし、たとえ一部の労働者において当時劣悪な状態がみられたとしても、そのよ

うな不幸の原因は、産業革命にあるのではなく、産業革命がなくてもやはり働いたであろうような当時の経済的要因、すなわち、凶作、政治的欠陥、戦争等にあると考える。したがって産業革命の惨禍の原因を、産業革命による技術的、経済的变化そのものなかに求める見解は明らかに誤りであると著者は断定する<sup>(1)</sup>。

以上指摘してきたよう点、すなわち、産業革命のとらえ方、産業革命の速度、そしてその影響といった点が具体的にはどのように説明されているかということを中心としながら、本書をその構成にしたがって紹介したい<sup>(2)</sup>。

しかし、このように著者の具体的な歴史叙述よりも史論めいた部分に力点をおく紹介の仕方では、本書のもつすぐれた価値を読者に十分に伝えられない恐れがある。ただ本書にみられるように、過去の龐大な研究成果と著者の深い知識を高度に圧縮した歴史的叙述を、更に簡潔で具体的で均衡のとれた形で紹介することは、到底筆者のなしうることではないという理由と、はじめて産業革命史に接する方にこの方面の研究に興味をもっていただくためには、このような紹介の仕方も一つの方法ではないかと考えたという理由によるものであることを諒解して

いただきたい。

(1) T. S. Ashton, *The Industrial Revolution*, p. 2. 邦訳、二一三頁。

(2) *Ibid.*, p. 161. 邦訳、一七一―二頁。

(3) アシュトン教授の経歴およびその学問的立場については、中川敬一郎助教授の訳書の最後に、適切な解説があるからそれを参照されたい。またアシュトン教授の七十歳を記念して出版された産業革命に関する論文集である、L. S. Presnell ed., *Studies in the Industrial Revolution*, Essays presented to T. S. Ashton, London, 1960 の巻末に全著作目録がある。

わが国における産業革命史研究家の本書に対する評価を二、三引用すると次のようである。

「産業革命の概説書は多数ある。然し、もし、その中の一冊だけを選べるといわれたら、私は、Ashton, T. S., *The Industrial Revolution* を選ぶことを躊躇しない。J. H. Plumb 博士は、「この書を、稀有の識見と深遠な学殖の書」と記しているが、決して過褒ではない。……既に本書を一読した後ならば、読者はこの書の価値を理解するのに苦しまないであろう。」小松芳喬「英国産業革命史」昭和二十八年、一条書店、『主要文献』二一三頁。

「僅々一六七頁の文庫本ではあるが、従来到達しえていた諸家の研究成果が広く咀嚼されて自実業範中のものとされておき、そのためどこまでアシュトン自身の論考がは

つきりしないところもあるが、最近における問題点は一応手ぎわよくまとめられ便利であり、流石に老手であるという感がある。……この『経済学と歴史の地峡』たる経済史の分野にアンウィンの人格と実証と理論とともに、かのケインズ、ヒックス、ロビンズ等の新経済学をとり入れて産業革命期経済社会諸事象解明に新しい光をあてようとするアシントン教授最近のゆき方は目をなせぬ重要さをもっている。』五島茂「経済史」昭和二十九年、三和書房、三七頁。

「この書物は、最近二〇—三〇年間におけるイギリス産業革命史研究の一つの決算でもある。……いまや歴大なこれらの研究成果にもとづいた新しい概説書が要請される段階に到達した。そしてまず生れたのが本書である。それだけでも本書は一応労作と言いうるのであろう。……また極めて簡潔で、具体的で、しかも均衡のとれた叙述は驚歎にさえ値する。勿論、本書は一般教養のために書かれたもので、決して専門書の体裁をとっていないけれども、……極めて意義深い労作であると思われる。」中川敬一郎、前掲訳書、一八六—七頁。

(4) これらの問題については、右にあげた書物に詳しいが、その他入門的なものとしては、邦文では、板橋重夫「産業革命研究への序章」歴史教育、第三卷、第一二号、佐藤明「イギリス産業革命の構造」昭和三十四年、ミネルヴァ書房、三—二二頁、英文のものとしては、このような産業革命に関する悲観説と楽観説との代表的なものを抜萃

編集した P. A. M. Taylor ed., *The Industrial Revolution in Britain, Triumph or Disaster?* Boston, 1958 を参照することが適當である。

(5) アシントン教授のこのような見解は、この書物の後に書かれた同じく産業革命期を、特に経済の量とその傾向という視点から扱った書物によっても同じようにのべられてゐる。T. S. Ashton, *An Economic History of England, The 18th Century*, London, 1955, p. 125. この立場は、この書物において、産業革命という言葉を、ほとんど使用していないことと、十八世紀を単に十七世紀と十九世紀との中間の世紀としてしかとらえようとしていないことによつて、更に一層確認できるように思われる。

(6) こうしたアシントン教授の見解は、右の書物においても繰り返し主張されている。なお、F. A. Hayek, *Capitalism and the Historians*, Chicago, 1954 の中で収められているアシントン教授の二つの論文 (The Treatment of Capitalism by Historians, *The Standard of the Workers in England, 1790—1830*) にも同じ一層端的に示されている。

(7) 本書の訳語は、読者の便宜上、大体において邦訳に従っていることをお断りしておきたい。

## 二 序 説 (第一章)

アシントン教授は、産業革命を産業的面上における変化

としてだけではなく、同時に社会的な面と思想的な面における変化としてとらえようとしているということに先に指摘したが、この序説においては、一七六〇年から一八三〇年に至る間にみられたこの三つの面における変化の特色と動きをまず素描する。

社会的な面における変化の顕著な特色は、人口の急速な増加という事実である。一七五〇年の六五〇万から一八三一年の一、六五〇万へと人口は著しく増大しているが、これは何によってもたらされたのだろうか。教授は、この原因は、出生率や移入民の増大ではなく、死亡率の減少に求められなければならないとする。十八世紀前半期ではまだ、安いジン酒への過度の耽溺と、間歇的にやってきた饑饉とが、莫大の数の生命を奪っていた。しかるに、この産業革命期には、死亡率は殆んど継続的に低落した。これには種々の影響力が働いていた。新鮮な肉、小麦、野菜の供給量が増大したことが、病気に対する抵抗力を強化した。石鹼や安価な木綿下着の普及に伴う清潔度の向上が、病気感染の危険性を減少せしめた。他方、家屋、排水、舗装等における設備の向上、製造工程の家庭から分離による生活様式の近代化、医学や

病院設備の発達も、死亡率を減少せしめた重要な要因である。だからといって、産業の発展こそが、死亡率の低下を通じて人口増加をもたらしたと性急に結論してはならない。何故なら、当時人口の増加という現象は、英国だけではなく、産業革命という変化が全然起らなかった西欧や北欧の多くの国でもみられたからである。しかし逆に、人口の増加こそが、それが商品の需要に与えた効果を通じて、産業の発展を刺戟したのだと断言することも誤りである。何故なら、もしそうだとすれば、十八世紀のアイerlandや、十九世紀のエジプト、印度、中国についても、経済の急速な発展を期待してよい筈であるからである。英国の産業革命期でもっとも注意しなければならないことは、このような急速な人口の増加に伴って、人々の生活水準の低下ではなく、むしろ向上に導くことを可能ならしめた他の生産要素の増加があったという事実である。

そこで次にそのような形で人口増加を支えた経済的諸要素における変化をみる。まず土地の要素をあげ、开拓や開墾による耕地面積の拡大、困い込みによる土地制度の変化、農業技術の改善による土地生産力の増大という

ことを指摘する。しかしより重要な経済的要素における変化は、資本が急速に増加しつつあったということである。名譽革命以後の安定した政治社会的諸条件と、社会階層の所得に大きなひらきをもたらす国債その他の新しい諸制度の登場とは、英国社会全体としての貯蓄力を増大させた。しかしながら、蓄積そのものだけでは、資本財の創造をもたらさない。単に貯蓄しようという傾向だけでなく、その貯蓄を生産的に使用しようとする傾向もやはりこの当時増大してきたのである。この傾向は十八世紀前半の利子率の低下傾向と密接に結びついている。資本を得るための利子率が低ければ低いほど、それだけ資本を固定した形態に釘付けすることによって失われる利益は少いのであるから、それだけまた資本の働きの拡大されることになるであろう。利子と資本と富との間のこの関係は、当時の人にははっきりと理解されていた。それにもかかわらず、産業革命前の半世紀における利子率低下の重要性は、未だかつて歴史家によってあまり注意されることがなかった。このようにして教授は産業革命の分析に今迄とりいられることのなかった利子率という新しい要素を導入し、もし産業革命の開始期とみら

れる十八世紀半頃において経済的発展の速度が高まったということについてのただ一つの理由を求めようとすれば、(そうすることは正しくないにしても)この利子率の低下こそそれであり、産業革命は、すべてこの比較的安全な資本のたまものであったと強調する。

産業革命には、以上あげた次第に増加してくる労働、土地、資本の三つの客体的要素を、調和的に働らかせる主体的要素が必要であった。この役割を果たしたのは、企業家(entrepreneur)と呼ばれる人々であった。企業家の出現は、当時の思想的環境の変化を背景としている。

この時代には、すでに古いギルド、都市、国家による産業規制はつぶれ、あるいは眠るがままにまかされ、個人の創意と企業心の活用に舞台は解放されていた。当時の産業上の発明はこうした精神的環境の反映であり、その発明を産業上に適用した企業家も、この流動的社会においてこそ垂直的な身分上昇をはかることができたのであった。産業革命と非国教徒との密接な関連がしばしば指摘され、それについて種々の説明がなされてきたが、大きくいって、それは、非国教徒が中産階級の中の比較的教育の高い層を形成していたという事実によって説明で

きるものであって、これによっても、当時の教育の基礎となつた思想的变化が、産業革命にとつていかに重要な要因であつたかが理解されよう。すなわち、産業革命は、経済的、社会的変革であつたと同時に、觀念の革命でもあつた。産業革命は、国家によつて産業は指導、統制されるものだという觀念が、自由な發展して行く經濟においては進歩は何ものにも制約されないという思想によつて屈服される過程を意味したのである。

### 三 初期における産業の諸形態(第二章)

この章では、十八世紀前半、すなわち産業革命直前における英国の産業がいかなる状態にあつたかということについてのべられる。

当時においては、英国国民の大部分はまだ農業によつてその生活を維持していた。この農業では、従来その基礎となつていた開放耕地が、漸次囲い込まれるという土地制度上の変化がみられるけれども、この囲い込み(enclosure)は、十三世紀以来ほとんど連続的に行われてきたものであつて、この時期にその性格を変えたものでもなく大規模化したものでもなかつた。産業革命破壊論者

たちは、この囲い込みによつてその土地を奪われた人々の暗い運命について、あたかもそれを悲しむべき結果であるかの如くに長々と詳述している。しかし、彼等は囲い込みについての重要な事実、すなわち、それが土地の生産力の増大をもたらしたという建設的な面を見落している。むしろ土地から切り離された農民は、土地から解放されて自由に他の活動にうちこむことができるようになり、その結果、国民全体の生活水準が可能になつたのであるから、囲い込み運動は、産業革命を導いた積極的要因として評価し直さなければならぬ。しかしいづれにせよまだ当時は農業革命と名づけうるようなものは行われなかつた。

この農民經濟から派生した織物工業では、すでにこの時期から変革の徴候はみえており、技術的進歩も行われ、生産組織も商人によつて組織化されつつあつたけれども、その生産はまだ小さな作業場か家内仕事場で半農的な人々の手によつてなされており、生産方法の変革によつて工場の中で営まれる生産形態がうみだされるようになるのはこの時期以後のことである。

他の主要産業も同様に、何らかの形で農業と密接に結

びついていた。また石炭産業では、その支配者は土地の所有者であって、その生産は農村的な組織で営まれ、坑夫たち自身も土地に結びついており、彼等の雇用主との関係も農業労働者の場合と酷似していた。採炭作業では、機械的発明の適用さるべき機械はほとんどなく、この産業における技術的進歩の速度は緩慢であった。そのため、燃料をその大部分の生産過程の基礎としていた当時の英国産業の発展は、全般にわたって制約されることになった。

燃料を多量に使う産業の一つは、製鉄業である。この時期にダービイの発明があり、その結果、銑鉄や鋳物の生産に際し、木炭の代りに石炭を燃料として用いることが可能となり、熔鉱炉や鋳物場を、森林の周辺から徐々に炭田地帯に発達せしめるようになった。しかし、この熔鉱方法は徐々にしか普及せず、その上、まだ鋳物の生産に限られていたので、製鉄業の大部分は依然として半農村的環境のうちに止まっており、その動力については水流の落下に、その燃料については縮少して行く森林地帯にしばりつけられていた。

このようにして、産業革命以前の半世紀における英国

産業は、都市的であるよりも、むしろ農村的であり、自然的資源の分布によって強く制約をうけており、その生産も、教科書が一口に、工業の家内制度 (domestic system of industry) と呼んでいるものによって営まれていた。

この産業革命以前の産業状態がこのように農村的であったからといって、産業革命の破壊性を主張する人々のように、当時の産業構造の社会的優秀性を誇大視したり、とりわけその労働条件を理想化してしまう危険に落ち入ってはならない。当時におけるような工業と農業との結合が、労働者にとってまるっきり幸福なものであったかどうかは疑問であろう。多くの労働者は生産のための道具や設備を所有していたにしても、それは逆に借金の原因となったし、彼等の働いていた家内作業場は不快さに満ちており、その作業は不規則性と長時間労働とによって特徴づけられていた。賃銀は大低出来高払いで支払われ、生産の危険を労働者の肩に投げかける長期支払制が支配的であって、そのため労働者の支出も不規則に浪費的になり、その生活水準は一層低い状態に落ち入らざるをえなかった。また親方制度や徒弟制度によって、

多くの子供は飢えと過労と虐待に苦しんでいた。労働条件がもっとも悪かったのは、近代化された産業ではなく、貧弱な発展しかとげていなかった家内制工業においてであったということが出来る。なお、破壊論者が理想化する雇用主と労働者との関係も、実際には商人や仲介業者を通じて支配されており、家内労働者は彼等に対して債務者であって常に弱い立場に立たされて、苛酷な条件をおしつけられていた。

こうした家内工業の悪状態は、当時存在していた過剰労働者がそこに入りこむことによってますます強められた。需要を上廻った労働供給が存在するのは「末期資本主義」の特徴といわれる「投資機会の涸渇」の結果だと主張する著者たちがいる。しかし、資本主義がまだ成熟しておらず、投資機会がまだ十分に開放されていなかったこの時期において、むしろ今日よりも遙かに大きな割合の規則的就業の手段をもたない人々がいた。こうした過剰労働者を経済組織の中に引き入れ、産業軍の有効なメンバーにしたことが、産業革命の一つの大きな成果であった。

結局、一七〇〇—一六〇年の時期には、人間活動のあら

ゆる分野に成長はあったにしても、その変化は既存の諸制度の安定を脅かすほど急激では決してなく、英国は、生産技術にも、産業構造にも、また国民の経済的、社会的生活にも、何ら革命なるものを経験しなかったのである、と著者はこの章を結んでいる。

#### 四 技術的革新(第三章)

この章では一七六〇年から一八三〇年に至るいわゆる産業革命期における産業の状態が、前の時期と比較してどのような変革をとげたかが、技術的革新を中心として考察されている。

この時期には、他のどの時代、どの場所にも比を見ないほど突如として (with a suddenness) 農業、交通、工業、商業、金融における各種の革新 (innovations of various kinds) が来襲した。この変化は到底、単なる進化的過程 (an evolutionary process) の用語で説明できるものではないとして、著者は、この時期を前の時代と著しく対照的な動きを示した時期としてとらえている。

(このような見解は、先にのべた革命という言葉は、経済的過程の連続性という本質的事実を見落す危険があるというアッシュ

トン教授の主張と矛盾するかの如くである。しかし、この主張は専ら伝統的革命説に対してなされたものであって、その意味ではアシュトン教授は基本的には連続説の立場にたつものであることは、ここで再確認しておかなければならないけれども、教授は、ここでもみられる如く、産業革命を単に技術的進歩の連続性の中に解消してしまう従来の連続説をそのまま受け入れていたものでないことも注意しなければならぬ。また先にもふれたようにそれを社会的、思想的变化としてとらえようとしていると同時に、後でみるように経済的变化にしても独特な新しい見方をしていることも、教授の産業革命論を理解するためには重要なことである。

まず農業では、困い込みが急速に進行した。この影響については、従来の産業革命史は、富をもった権力者が貧者を土地から追い払ったという観点から書かれてきたが、困い込みが土地の生産力を増加させたという観点が導入されなければならぬとして、教授は前章でのべたことをここでまた強調する。そして困い込みによって農村人口が大幅に減少したと一般に信ぜられてきたが、最近の研究では、困い込みによって以前耕作されていなかった土地も耕作されるようになって雇用をせしめ、この時

期の農村における人口減少は一般的なものではなかったということが示されているし、農村を出て行った人々も、追っばらわれたのではなく、高い賃銀水準をもった工業地帯へ徐々に引きつけられていったということの方が正しいとしている。このような土地制度の改革と同時に、徐々にではあるが農業技術の改良が普及し、その結果、土地の生産力は増大し、労働者の口にする食物の質は向上し、彼等の健康や生活に良い影響を及ぼし、工業生産発展の原因ともなった。

農業と同じように、石炭業でもその技術的進歩は漸進的であったけれども、製鉄業における革新はめざましかった。銑鉄だけに限られていた燃料としての石炭の使用も、コークの発明によって、金属加工業の原料の中心であった銑鉄の生産にも応用できるようになった。そして銑鉄工場はその森林地帯への依存から解放されると同時に、更に鉄鉱石および石炭の採掘から、でき上った鉄を細断し棒状鉄にするまでの全工程が、単一の企業家グループによって支配されるような集中的大企業が出現してくるようになった。その結果、鉄の生産はおそろしく増加し、あらゆる産業が、この安価な鉄の及ぼす促進的影

響を受けることになった。

このような製鉄業の発明も、当時の他の多くの技術的発明と同じく、新式動力の援けがなかったらその効果を發揮しえなかったろう。これこそワットの蒸気機関であった。この出現は数百万の男女の生活条件をすっかり変革してしまった。この新式の動力と、これを媒介する伝動機構とが、産業を近代へ飛躍させる際の旋回軸となったのである。

変化のもっとも急激であったのは、木綿工業においてであった。ハーグリーブス、アークライト、クロムプトン、カートライトによるめざましい機械の発明がこの産業においてなされて、動力としての蒸気機関の導入が可能となり、綿工業は従来の自然的条件の制約から解放され、その生産の中心を農村から都市の大規模工場へおくようになった。この時期の終りには紡織兼営工場が増大する傾向もみられた。製鉄業におけると同じく木綿工業においても、産業上の変革は大企業の勃興および諸工程の統合と結びついていた。

製鉄業や木綿工業のような産業では、生産の発展は新式動力や新式機械と結びついていたが、このような要因

だけが産業革命を導いたのではない。他方、熟練の発達と分業の強度を高める方法によって、産業革命を経験した陶器製造業のような産業もあったことを見逃してはならない。また、新しい土木事業による運河、道路の当時における著しい発達と、この時期の最後からの鉄道の出現とが、産業や経済生活に与えた影響も重大なものであった。

しかし技術的変革の行われた分野が、国民経済のほんの一部にしか過ぎなかったということは、肝に銘じておかなければならないとして、アシュトン教授は、この章の始めの部分ではこの時期の変化の急激性を強調していたのに対し、この章の結びの部分では、経済全体からの視点にたつてむしろその非激変性を主張する。すなわち、諸改良の行われたのは、資本財および中間生産物に關係のある産業の域を出ず、最終消費財産業はほとんど直接の影響をうけていないのであって、産業革命の終期といわれる一八三〇年においても、なお広大な面積の農村的英国があり、多くの農村都市があった。そしてそこでは百年あるいはそれ以上も前とほとんど同じように生活が営まれており、大都市の周辺ですら、古い状態の下

で、難儀してこつこつ働いている男女がいた。

##### 五 資本と労働(第四章)

この章の始めの部分で、著者は産業革命における経済的变化を、二つの運動(the two movements)の結合したものととらえようとする見解をのべている。一つは、技術工学上の出来事であって、資源を特定の目的に使用する方法(技術)の変化に存し、他の一つは、経済学上の出来事であって、資力(あるいは資本)の量および分配に関する変化に存するという。この二つの運動は全く密接に結合しており、発明がなくても産業は緩慢に進歩を続けたかもしれないが、そこには産業革命は起らなかったであろう。また他方、新たな資力がなかったら諸発明は恐らく不可能に近かったであろうし、またなされたとしても限られた規模でしか応用されなかったであろうとのべている。したがって、前章での技術学上の出来事にひき続いて、本章ではその技術の成果をものにせしめた経済学上の出来事を考察することになる。

まず産業革命を可能にした資本は何処から来たかということであるが、一つの方向だけを重視することは正し

くなく、あらゆる方向から流動的な資本がもたらされたと考えるべきであるとする。では、その資本を基礎として出発した企業は、どんな方法でその規模を拡大し、資本を蓄積していったのだろうか。それは、企業内の利潤の再投資(ploughing back)によるものであり、企業家の不断の労働と節約と誠実とによって達成されたものであるから、初期の資本家たちに対してどういことが言われようとも、放縦という罪だけは到底彼等に負わせられないものである。「産業資本はそれ自身のもっとも主要な源泉であった」ということができよう。

しかし、その方法には限界があり、より大きい資本を必要とすることがしばしばあった。産業革命の初期では資本市場が限られていたので、長期資本(固定資本)をうる手段としては、新しいパートナーを企業に追加したり、工場の建物を抵当にしたりする方法が重要であった。この過程では商人が大きな役割を演じており、商業資本の固定資本への転化は、工業の発展の重要な原因であったと考えられよう。企業家は同時に短期資本をも必要としたが、その供給は不足しており、例えば小額貨幣の不足は質銀の長期支払制とか物給制とかいう悪弊をも

たらした。この悪弊の罪は従来よく雇用主の側における貧慾や悪意に帰せられてきたけれども、本当は政府自身の責任である貨幣制度の不備にあったのだ。

もし適切に組織された銀行制度があったら、こうした困難の多くは避けられただろう。しかし、イングランド銀行や商業銀行は、国家に対する金融と首都の商人や貿易会社に対する金融とにその活動を集中していたため、工業生産者の必要には適さなかった。工業の発達と結びついてその数を増した地方銀行も、法律が株式会社の発達をさまたげていたので、いづれも比較的小さな企業としてとどまっておき、短命でもあって、限定的な役割しか果たさなかった。もちろん銀行は産業革命において、短期の資金を動員し、資本に対する需要のすくない地域から、資本に飢えている地域に移動せしめるといふ貢献をしたが、新技術の工業化に必要な資本の主要な源泉であったかどうかは疑問である。

さて次に資本と結びつく労働における変化、すなわち労働者の工場制度への移行過程（アシュトン教授のいわゆる社会的変化の過程）をみてみよう。十八世紀には、労働者の職業的、地域的移動においてまだ多くの障碍があっ

た。救貧法、とくに居住の制限、徒弟制度にあらわれる産業上の慣習、労働者の家族のための副業の必要等が、労働者の移動に対して阻止的に働いていたために、産業革命の初期に雇用主が直面したもっとも大きな問題は、新しい工場で働く人々を探し出すことであった。

木綿工業における工場労働者は、失業した大量の不熟練労働者が存在し、それが重荷になっているロンドンや南部の教区から、救貧委員の手によって、集団的あるいは一家もろともに供給された。こうしたルートによって入手された工場「徒弟」の状態は悲惨なものであったといわれているが、その原因はしばしばいわれるように工場主が貪欲であったということにあるのではなく、このような低劣な徒弟しか手に入れることができなかったということや、初期の工場経営者は本質的には商人であって工場へはあまり訪ねてこなかったために自分の工場の状態については無知であったということに求められなければならない。したがって次第にこのような不幸についての関心が資本家の側においてすら高まってくるようになる、労働時間を制限し、最低水準の衛生と教育を規定する工場法も制定され、徒弟労働に対する成年労働

の割合が増加するにつれて、その状態は改善された。従来破壊論者によって強調されてきたこの過労に陥った徒弟とか失業した家内織布工との窮状だけが、織物業における産業革命の物語のすべてではない。その明るい面として、諸発明が労働を軽減し、その収入を増大させ、女子の社会的独立を可能にさせ、長期支払制、物給制および雇主に対する借金を消滅させ、組合の結成を容易にせしめたことを忘れてはならない。また石炭業においても中心問題は、必要な労働力を確保することであり、この産業においても従来は産業革命のせいによってきた弊害が存在していたが、それは産業革命以前からあったもので、実際はむしろ産業革命によって消滅して行く傾向にあったものである。

これらの産業とはちがった経過をたどって発達した土木事業、機械工業、鉄・化学製品・陶器の製造業では、問題は、工場労働者を見出すことではなく、新技術で労働者を鍛えあげることであった。こうした熟練の高度化は古い手工的熟練によって支えられることを必要としたのであって、産業革命が熟練を破壊したということ強調する従来の叙述は、虚構であるばかりでなく、全

く事実と反するものである。そしてこれらの産業の諸発明は資本節約的な性格を強く有していたので、その結果は単に生産量を増大せしめただけでなく、生産物の価値のうち労働者に帰すべき分前を増大せしめ、労働者の収入に有利に作用した。

たしかに、工場に投下された資本を有効に使うために、そこにおける労働は規則化され規律化され、従来のような怠惰や不規則な仕事の仕方は許されなくなった。

この「新しい規律」(new discipline)は産業革命の重要な一面であったが、これに適合して行く過程における労働者の苦しみは、それがもたらした所得の増大に対し、労働者が支払わねばならなかった代価でもあったのである。

## 六 「個人主義」と「レッセ・フェール」(第五章)

本章では、産業革命期における思想的変化が、資本家および労働者の組織における変化と関連づけられながら考察される。産業革命の歴史を曖昧ならしめている諸伝説のうちでも、当時の人々がいろいろの点で、自己中心

主義的に、貪欲に、また反社会的になったという見解ほど史実にそぐわないものはない。実際には、当時の人々はいろいろな組織の中で成長したのであり、あらゆる利害、あらゆる伝統、あらゆる希望は団体のかたちで表明されていた。

だから、このように団体組織にみちた社会において、産業資本家はその仲間から超然としていたはずがない。企業そのものがパートナーによる組織であり、企業家は何等かの社交的あるいは学術的団体に加入していた。その団体は、実際には、競争の制限や、生産量、価格、賃銀、信用条件等の調整を目的とする企業上の組織であることが多かったし、産業によってはかなりの程度まで企業連合を推進した場合もあり、英国の諸産業の連合体を設立しようとする計画もたれたこともあった。しかしまだ一般に産業資本家たちの本能は、政治を回避しようとしていた。この時期の終りに、産業資本家が国家の大勢力となったのは、政治によってではなく、彼等自身の事業に対処しようとした不断の注意によってであった。

他方、労働者の団体もいろいろな形をとってあらわれた。家内工業が支配的であった十八世紀前半において

も、職人たちの間でクラブが力強く成長していたが、その性格はギルドに近く、その活動は古い産業規制の実施の要請に向けられていた。一七六〇年以後になると、しばしば労働者の暴動が炭田、港湾、織物業地帯に発生したが、自然発生的でありすぐに消滅した。十八世紀の終り頃になると、工場生産の中心地に、職業的基礎をもった共済組合が力強く成長し、利害の共通性に導かれて地方的な団体は連合しはじめていた。この世紀の終りに、労働組合主義 (Trade unionism) は、もはや、ばらばらの一時的な組織でなく、一つの社会運動としてあらわれていた。

だから、産業革命の時代が、狭い意味での個人主義の時代であったとは考えることはできないけれども、それが自由放任レッセゼールの時代であったと主張することはある程度まで正しいことなのである。産業革命の一世紀以上も前から国家は経済面から退却しつつあったことはたしかだが、国家が依然として前から戦線を固守していた部分もあり、特に外国貿易、航海および英帝国内の経済関係の全分野では国家の干渉をうけていた。この制度に対する攻撃にともなうて人々の心に生まれつつあった思想に、

比類なき論理と体系を与え、国家の命令の代りに、一般人の自発的撰択と行動とを指導原理として確立したが、スミスの「国富論」であった。そしてこの確信こそが、産業革命に特徴的であった楽観主義的精神を刺戟したのであった。

しかし、この「レッセ・フェール」の思想が、経済から社会一般の制度にまで拡張されたところに、産業革命期の社会的混乱の一つの原因があった。それにも拘らず、もし立法機関が早い速度で新しい社会制度に適合するように法令を作り出したとしても、やはり社会的混乱は免れなかったであろう。何故ならば、科学の進歩が、行政の進歩よりも急速であることは、当時も今も同じであるからである。このようにしてアシントン教授は、普通産業革命に起因するとされる社会的害悪は、経済的進歩の速度に、政治的進歩の速度がおくれたということに求め、産業革命が、一般の男女に充分な報償をもたすことができなかつたとしても、それは社会制度に対する行政的処置の欠陥によるものであって、経済的過程の欠陥によるものではないと結論する。

## 七 経済的変動の推移(第六章)

この最後の章では、当時の英国に与えられた外部的条件が経済的変動におよぼした影響と、それと産業革命における社会的効果との関係が考察される。

産業革命はある一つの期間としてではなく、一つの運動としてとらえなければならぬと、アシントン教授はこの章の冒頭で主張する。したがってこの運動の展開は、他の国では異なった時期にみられるとしても、その基本的性格(人口の増大、科学の工業への適用、資本のより集中的で大規模な使用)と影響(農村社会の都市社会への変貌、新しい社会階級の勃興)には変りはない。しかし、いずれの場合でも、その変革の過程は、それぞれの時間的、場所的環境の影響をうけているものだ。だから、英国において従来産業革命のせいになされてきた不安の多くは、産業革命がなくてもやはり働いたであろうような諸力の結果であったのだ。

当時の経済的変動に影響した要因の一つとして、物価の変動がある。その変動の原因の一部分はたしかに産業革命にあるが、あるものは産業革命における技術的変化

や経済変化とは無関係な原因によって生じているのである。

天候に大きく左右される土地からの収穫物の出来不出来も、経済変動の重要な要因であった。不作の時期に続いて通常、産業の停滞、賃銀の下落および失業がやってきたが、それは、他ならぬ食糧の価格の上昇を通じて地主や農業者にもたらされた購買力が、彼等の閉じた手から極めて徐々にしか流れ落ちなかつたからである。

外国での出来事も、同じく多くの労働者の所得と雇用に作用した。当時の英国は、穀物を中心とする多くの飲食物を、工業原材料とともに外国から輸入すると同時に、その工業生産物の市場を海外に求めるようになっていた。この国際商業への依存度の増大が、経済の不安定のもう一つの原因を作り出していた。

また、国内における投資の波動も、経済的変動を引きおこした重要な要因である。この場合、政府の貨幣政策に左右される市場利子率がそれに大きな影響を与えている。特に農業、建築業、建設工事にとっては、この貨幣の価格の変動は決定的重要性をもっており、その生産数量の変動は、利子率の上下にもなつてあらわれている。

る。

経済的変動をもたらしたもつとも大きな力は、政治的なものであった。産業革命期の大半を通じて、英国は戦争をしていたのである。これらの戦争によるもつとも大きな損害は、自然的破壊によってではなく、経済的組織の歪曲や社会的関係の混乱を通じて与えられた。戦争と戦後の条件は、物価、利子、実質賃銀等に大きな変動をもたらした。階級的感情や苦情をも増大させた。また当時起つた労働者の暴動は、いづれも政治的事件や凶作のために不況に陥ったときに発生しており、労働者の真の災厄が何に起因するかを示している。

産業革命の船長たちがその航路を進んだのは、このような荒波のなかであった。彼等の遭遇した諸困難の多くは、彼等自身が作り出したものであることは明かである。しかし、産業革命の災厄の主要な部分は、彼等の熟練や熱意の不足や勇氣の不足によるものではなく、「自然」の力や政治的変動の波によるものであった。もしも収穫が均一に良好であったならば、政治家が安定した価値の水準と適切な交換手段とを用意することに注意を向

けていたならば、さらに、物価を上昇させ、利子率を騰貴せしめ、資源を破壊に導くところの戦争がなかったならば、産業革命の過程は、より円滑であったであろうし、そしてその結果がこうも議論されることもなかったであろう。

たしかに産業革命の諸結果のあるものが有害であったことは認められねばならぬけれども、それが与えた有益な面を見逃してならない。特に今まで産業革命の労働者階級への影響については多くのことが語られてきた。そして産業革命は不幸と貧乏の他にはほとんど何もたらさず、十九世紀初期の英国労働者の生活水準はアジア的生活水準にまで押し下げられたという見解を立てた学者もある。しかしより周到な研究は、北部の織物業地帯における労働者の福利は著実に改善され、またロンドンの労働者も単にその幸福を維持しただけでなく、大いにそれを増進せしめたということを示している。産業革命が、ただ富者をますます富裕にし、貧者をますます貧乏にしただけだとするならば、それはおかしなことである。何故ならば、産業革命が生み出した商品は、一般に奢侈品ではなくて、必需品やそれを作るための資本財で

あったからである。産業革命末期までには、戦争の影響は消え去り、木綿製品、毛織物、食糧、飲料等は、少数の人によってではなく、大衆によって消費されていた。かくしてアシントン教授は、産業革命による経済的効果を積極的に評価すると同時に、破壊論者が主張する産業革命の暗黒面があったとしても、その原因は産業革命にあるのでなくて、産業革命がなくてもやはり作用したであろうな凶作、政治的欠陥、戦争等の当時の経済外的要因にあることを強調し、この紹介の冒頭に引用した文章をもつて、この書物を閉じている。

#### 八 若干の批判

はじめに注意したように、本書の極めてすぐれた価値は、このような史論めいた部分にはなく、具体的な歴史叙述にあるのだから、紹介者としてはその意味でも実物に接していただくことを願っている。しかし、本書は繰り返しのべてきたように特定の研究史的背景にたつものであるから、これが今日の産業史研究の決定的結論とすることはできないのであって、その点から考えて、本書に対する若干のコメントを試みることに紹介者として

の責任であろう。

まずいえることは、本書は産業革命破壊論者の「伝説」を除こうとした代りに、他の新しい「伝説」をこしらえる恐れがあるということである。すなわち過去の社会主義的政治信念による産業革命史の分析に対して、全く逆の政治的信念による産業革命史分析という態度が、客観的科学的分析を主張した本書の背景となっていないかということである。<sup>(1)</sup>たとえば労働者の生活水準は向上したと主張する場合、その主張基礎となった統計資料が付してあった限定を無視して、結論を出すにはまだ疑わしいものについて結論を大胆に出してはいないかということである。アシュトン教授の基本的立場である経済史の近代経済学的解釈、すなわち数量化統計化の努力が充分になされた上で結論が出されているかは疑問である。非常に限定された資料によって労働者の状態は向上したという結論を導き出していないだろうか。<sup>(2)</sup>

しかしより基本的な疑問は、本書の基本的態度についてである。産業革命の正しい理解は、近代経済学の諸概念を基礎とする分析方法によってよりよくなされるものだろうか。産業革命によって確立をみた資本主義は単な

る経済機構としてではなく、社会体制としてとらえられなければならない。産業革命は生産をめぐってなされた人間と人間の間の諸関係における変革としてとらえることによって、よりよく解明できるであろう。産業革命期における社会的動揺を単に戦争や政治の混乱から説明しようとする見解は、機械の資本主義の利用が労働者階級に与えた本質的な影響を正しく評価することができないであろう。<sup>(3)</sup>

もちろんだからといって、アシュトン教授の本書のもつ大きな意義を否定するものではない。本書は龐大な新しい実証史学の研究成果に基づいた貴重な労作であって、産業革命史研究の新しい一つの在り方をわれわれに示唆してくれている。本書で示された洞察力に富んだ多くの卓越した見解は、いずれの立場にたつにせよ無視することのできないものを含んでいる。産業革命史研究の出発点は、アシュトン派あるいはトインビー派の何れか一方の立場によるのではなく、両者の業績をまず謙虚に理解することにあることを、充分に理解していただきたい。

(1) 英国の実証史学の思想的背景については、E. J. Hobs-

Bawn, Where are British Historians Going? The Marxist Quarterly, Vol. II, No. 1, Jan. 1955 の紹介である。佐藤明「イギリス史学の動向」経済評論、昭和三十年、十月号を参照されたい。

(2) W. Woodruff, Capitalism and the Historians: A Contribution to the Discussion on the Industrial Revolution in England, The Journal of Economic History, Vol. XVI, No. 1, pp. 2—9.

(3) このような立場としては、先にあげた中川、佐藤、板橋氏の論文や著書の他に、大塚久雄「産業革命と資本主義」現代史講座V、昭和二十八年、M. Dobb, Studies in the Development of Capitalism, London, 1947, pp. 25—81 (京大近代史研究会訳「M・ドブ、資本主義発展の研究II、昭和三十年、岩波書店、五五—九五頁)を参照されたい。

われわれは、アシユレイの古典的名著における産業革命に関する次のような叙述にあらためて耳を傾ける必要があるのではないだろうか。

「工場制度の確立は、かりに社会の情勢が他のすべての面においては全く申分のない状態にあったとしても、必然的に大きな社会的危険と困難とを伴うものであった。しかるに、十八世紀末から十九世紀初頭へかけてのイギリスが、社会情勢において決して申分のない状態になかったということは、今更述べる必要もないであろう。……われわれはもっぱら当時の産業状態に着目したいと思う。さてそ

の点に関して、われわれは、完全に異なる二つの系列の事実を考慮しなければならない。まず第一は、新しい機械製品と手工業による同一製品との競争の結果である。従来広く行われていた手工業が機械的生産方法によって代られたというところは、現在までのところ、いかに智恵をしぼっても、何れの国も十分に解決することのできない一つの問題を生み出した。特にイギリスにおいて、チャーターティスト代の社会を一層暗くさせたものは、長期に亙る手織工の苦しみであった。第二に考えねばならない問題は、……機械的産業そのものの内部に起った新情勢であった。すなわち、それらの産業の何れにおいても、機械の購入に要する多額の費用は、必然的に雇主と被備者との間に広い社会的間隙を造り出した。……多数の労働者が集中して雇われる場合においては、個人的結びつきは失われ、それに代って純然たる『金の上の結びつき』の生ずるのが常であった。……さてこのようにして、個人の結びつきが弱まるに従って、雇主たちの傾向は、利潤追求の立場からものを判断することが自分らの権利である……ということをも、ますます主張するようになり、また、必要な労働力をできるだけ安く購入することに一層専念するに至った。……しかるに織物工業においては、更にそれ以外に弊害を生み出すような深刻な当面の原因があった。それは、新しい機械の採用によって作業が体力的に楽になってきたことによって、婦人や子供を大量に雇用することが可能となってきたということである。また、高価な機械に資本を投入した結果、

それまでできるだけ休まずに運転することが雇主の利益と考  
えられるに至ったことである。……」W. Ashley, 『The  
Economic Organization of England, London, 1st ed.,  
1914, 3rd ed., new impression, 1957, pp. 159—61. (矢

口孝次郎訳「アシュリー著アレン増補、イギリス経済史講  
義」昭和三十三年、有斐閣、二〇三—六頁。)  
(一九六〇・二・五)(一橋大学講師)